

## 日本医史学会編『医学史事典』刊行記念 令和5年1月例会

### 第V部 社会の中の医学

#### ——学際領域としての医学史——

永島 剛

第V部のねらい：すでに第I部から第IV部までにおいて、「世界の医学」「日本の医学」の古代から近現代までがカバーされているにもかかわらず、別途「社会の中の医学」が第V部のテーマとして設定されたことは、本事典の特徴の一つである。

思い起こせば2019年5月24日に行なわれた初めての編集幹事会で、編集委員長から「医学・医療は、あらゆる時代・地域において、それぞれの社会や文化と深く関わってきた。医学・医療の発展・普及により、社会の中の人々にとって医学・医療の存在感を増している現代であるからこそ、医学と社会との関係も含めて医学の歴史のあらゆる面についての視点を提供することは重要」という旨のご指摘があり、この第V部を設ける方針が決まった。

近年では、人文・社会科学の領域から健康や医学・医療史のテーマにアプローチする研究者も徐々にではあるが増えてきており、さまざまな学問的バックグラウンドをもつ研究者の力を結集するという意味も大きかった。そうした人文・社会系の研究者は日本医史学会の会員ではない場合も多いが、今後の医史学研究のさらなる幅のひろがりや、連携をつうじた議論の活性化への期待を込めて、本学会の会員以外の方にも項目執筆を依頼することとなった。

第V部の項目・構成：編集委員を廣川和花、高林陽展両氏にお願いし、項目の選定にあたった。一口に人文・社会科学的な視点からの医学史といっても、そのアプローチは多様である。どのような項目を設ければ、この分野を幅広く扱うことにな

るのか悩むことになった。他方、医学が社会と不可分である以上当然ながら、第I部から第IV部においても、社会・文化との関連が深い項目がありうるわけで、そちらと直接的に重複しない項目の設定の仕方を工夫する必要もあった。そこで、さしあたり以下の6つの緩やかなテーマ軸を設けつつ項目の選定を進めた。その後、執筆者とのやり取りや編集委員会での調整をへて、最終的な構成が決まった。

#### ● 学際性のなかの医学史

このテーマ軸のもと、医学・医療への社会史的アプローチの史学史と、人文社会系の諸分野と医学史との関わりについて解説する項目を配置した。

※「学際領域としての社会医学」永島剛／「医療の社会史（欧米）」高林陽展／「医療の社会史（日本）」廣川和花／「医療の社会史（アジア）」飯島渉／「医学史と社会学」「医学史とジェンダー論」宝月理恵／「医学史と文学」「医学史と身体・文化」石塚久郎／「医学史と倫理学」田中祐理子／「医学史と経済学」後藤基行／「医学史と地理学」花島誠人／「医学史と人口学」逢見憲一

#### ● 医学史のなかの人びと

医学・医療の供給側のメインストリームの人びとについては第I～IV部で言及されることが多いため、ここではおもに患者側や、近現代における民間での多様な医に関する人びとの活動に焦点をあてる項目を設けることとした。

※「患者の歴史」鈴木晃仁／「都市と医療者集団」井上周平／「出産の社会史」長谷川まゆ帆／「家族と医療（欧米）」中野智世／「家族と医療（日本）」沢山美果子／「高齢者と医療」柳谷慶子／「近現代における西洋民間療法」服部伸／「近現代における伝統医学（日本）」星野卓之／「近代中国に受容された日本の伝統

医学研究」「近現代における伝統医学（東アジア）」真柳誠

### ● 健康・病・社会

いくつかの病気や障がいの社会史・文化史に関する諸項目。

※「歴史のなかの感染症」見市雅俊／「寄生虫病と社会」井上弘樹／「ハンセン病と社会」廣川和花／「性感染症と社会」田村俊行／「HIV/エイズと社会」本郷正武／「がんと社会」永島剛／「痛みの医学と社会・文化」高林陽展／「視覚障害と社会」聴覚障害と社会」肢体不自由と社会」木下知威／「ダウン症と社会」大谷誠／「精神病と社会」高林陽展／「精神医療とメディア」佐藤雅浩

### ● 医の施設と社会

医学・医療に関連する施設の多くについては第I～IV部で言及されており，ここではおもにいくつかの専門病院・療養施設の社会背景についての解説を収めることができた。

※「病院（子ども）」柳澤波香／「病院（結核）」福田真人／「結核患者の療養所生活」青木純一／「病院（性感染症）」田村俊行／「病院（精神科）」高林陽展／「私宅監置」橋本明

### ● 医と社会状況・政策

取り上げることのできた国・地域は限定的ながら，ここにはおもに公衆衛生・社会医学・公的医療制度の展開に関連する項目を収録した。

※「公衆衛生（イギリス）」永島剛／「公衆衛生（フランス）」大森弘喜／「公衆衛生（ドイツ）」梅原秀元／「公衆衛生（アメリカ）」平体由美／「衛生組合」尾崎耕司／「学校と衛生」梅原秀元／「食と栄養（給食）」食と栄養（ナチス）」藤原辰史／「優生学と医学」梅原秀元／「産業と医療」杉田菜穂／「農村と医療」鬼嶋淳／「植民地医学・帝国医療（東アジア）」井上弘樹／「植民地医学・帝国医療（インド）」脇村孝平／「植民地医学・帝国医療（アフリカ）」磯部裕幸／「国際赤十字・赤新月運動」館葉月／「医療の社会化（イ

ギリス）」四谷英理子／「医療の社会化（ドイツ）」馬場わか／「医療の社会化（北欧）」石原俊時／「医療の社会化（アメリカ）」平体由美／「医療の社会化（中国）」福土由紀

### ● 医学・医療と「近現代」の問題性

近現代社会において向き合う必要があると思われる医に関連する問題群から，特に第二次世界大戦と，高度経済成長期における公害や薬害に関する諸問題を解説。なお，本事典の編集期間中の2020年に新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生したことを受け，「新興・再興感染症」の項をこの第V部の最後に追加することができた。

※「総力戦と医療」高岡裕之／「人体実験・医学・戦争」土屋貴志／「戦争と看護」川原由佳里／「戦争障害者と医療」北村陽子／「被爆と医療」久保田明子／「イタイイタイ病」雨宮洋美／「水俣病」萩原修子／「大気汚染公害」尾崎寛直／「薬害」本郷正武／「ワクチン問題」中村安秀／「新興・再興感染症」山本太郎

おわりに：第V部では，72項目を55名の方に執筆していただいた。担当した編集幹事の浅学ゆえ，トピックの偏りや欠落は多々あるに違いない。それでも，お二人の編集委員と多くの執筆者のご尽力をえて，医史学の学際性や，医への多様な社会史・文化史のアプローチの概要の一端は提示できたのかとも思う。「社会の中の医学」の歴史研究は，まだ確立・体系化された分野とはいえない。それだけに，さらなる研究・議論の余地がある。研究者同士だけではなく，一般の読者にも興味をもっていただけるとすれば，その意義はさらに大きい。この第V部を含めた本事典が，これからの知的展開の足掛かりのひとつになればと願っている。